

コンビネーションなわとびによる人間関係の向上に関する事例的研究

水落 芳明*・松谷 和彦**

(平成24年9月28日受付；平成24年10月16日受理)

要 旨

本研究では、小学校体育学習の「体づくり運動」の一環であるなわとび運動において、長短なわとびを用いたコンビネーションなわとびの教育実践とその評価を行い、グループ内の人間関係の向上をねらいとした調査を行った。その結果、練習中の励ましやアドバイスの声かけなどの会話の増加や他の学習者と一緒に練習する時間の増加により、技の成功を自己と他者が同時に評価・確認でき、達成感や喜びを共有することができた。それにより、人間関係の向上が見られた。

KEY WORDS

小学校体育科、コンビネーションなわとび、人間関係、コミュニケーション

1 問題の所在

小学校学習指導要領解説体育編(2008)⁽¹⁾では、改善の方針の中で「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」を示している。

体育におけるコミュニケーションの重要性における先行研究として、小松崎ら(2001)⁽²⁾は、「体ほぐしの運動」の中には「体への気付き」、「体の調整」、「仲間との交流」という3つのねらいがあり、他者との交流を直接的に体験する機会が減少している現代の子どもの生活環境を考慮すれば、「仲間との交流」のねらいに大きな関心を払う必要があると述べている。また、近藤ら(2000)⁽³⁾は、体育授業過程における学習集団の会話が児童の人間関係の変容に及ぼす影響について検討し、会話の分類から、体育授業過程における班内の会話が児童の人間関係を変容させると述べている。また、日野ら(2000)⁽⁴⁾は、学級集団の意識と子どもたちの体育授業評価がどのように関係するかを検証し、体育授業の成否が学級集団の人間関係や雰囲気に影響を及ぼすことが明らかであると述べている。また、米村ら(2004)⁽⁵⁾は、体育科において、学習者の相互作用を軸としてあたたかい雰囲気ですべて進んだ場合、教師の教示を中心とした授業よりも、学習者の授業に対する評価が高いことが証明され、体育科の学習における学習者の相互作用を軸とした学習の可能性を示唆している。

さらに、栗田ら(2007)⁽⁶⁾は、体育の授業で学習者同士の相互作用を促す『学び合い』の学習を進め、学習者同士の相互作用を生かした授業展開の中では、学習者は互いに学び合いながら、高い達成度で技能を向上させると述べている。

しかし、体育授業におけるかかわり合いや相互作用による運動有用感の向上や技能の向上についての研究はなされているが、人間関係の向上との関連については多くはなく、興味関心を引く課題である。

一方、なわとび運動は、手軽にできる運動であり、技能の習得を自らが確認でき進歩の具合を把握できるという特性を持っている。また、運動量が豊富なため体力や敏捷性を高め、リズム感も養うことができる。さらに、2人および長短なわとび等で友達と教え合ったり、グループで協力したりして、他とのかかわりといったコミュニケーション能力を伸ばしていくことができる運動である。

佐伯ら(2011)⁽⁷⁾は、上原(2010)⁽⁸⁾の新しい教材としての「二人連鎖交互回しとび」の有用性について、「従来のなわとび運動が苦手な子どもたちにも達成感や有用感を提供できる教材となりうる」と述べるとともに、「なわとびは基本的に個人の運動であるが、連鎖交互とびは仲間とかかわって初めて成立する運動である」と述べ、「相手と協力し、会話を通してコミュニケーションをとることが必要である」と述べている。しかし、二人連鎖交互回しとびとコミュニケーションとの関連については明らかにしていない。また、二人連鎖交互回しとびのようなコンビネーションなわとびと呼ばれる運動の実践は多くなされているが、その運動と人間関係との関連に注目した分析はされていない。

*学校教育学系 **上越教育大学大学院(専門職学位課程)

い。

そこで、本研究は、コンビネーションなわとびの授業を通して学習者の人間関係に対する効果を検証する。

2 研究の方法

2.1 調査の対象

新潟県公立S小学校 第5学年1クラス 40名

2.2 調査期間

平成23年10月～11月

2.3 教科、単元、時数

体育 体づくり運動（なわとび） 6時間

2.4 調査方法

2.4.1 授業デザイン

① 授業者 発表者1名

② チーム編成

昨年度までのなわとびの技の習熟を考慮し、5, 6人の等質グループとなるように編成した。

③ 技の種類

・トラベラー

単縄1本を使用し、学習者1が縄を回している前後に学習者2が入って跳ぶ技。

・ホイール

単縄1本もしくは2本を使用し、2人で縄を回して跳ぶ技。

・レインボー

長縄1本、単縄1本を使用し、長縄を回す中で単縄を回して跳ぶ技。

(各班に長縄1本、短縄人数分を用意した。)

④ 指導計画

時間	内 容
1	オリエンテーション2人組、3人組のいろいろな跳び方を知り、グループで協力して運動することを確認する。
2～5	グループで長短なわとび運動を行い、グループ発表に向けてかかわり合いながら技能の向上を図る。
6	グループでできるようになった技をお互いに発表し合う。

授業者は主に各班を回り、発表する技の順番についてや技の習得過程おいてのアドバイスを行う。

2.4.2 記録・分析方法

- ・ビデオカメラを各グループごとに1台ずつ、計7台設置し、学習者がかかわり合う様子を分析する。
- ・小松崎ら(2001)^②の体育授業における児童の集団的・協力的活動を評価する形成的評価票を活用し、毎回の授業後にアンケートをとり、グループでの練習や話し合いが人間関係づくりに及ぼす影響を分析する。
- ・話し合いの様子をビデオカメラ及びICレコーダー7台で記録し、分析する。

3 結果と考察

3.1 分析1：質問紙調査から見た人間関係の向上

3.1.1 目的

毎授業時間終了後のアンケートから学習者の仲間づくりの成果を比較し、意識の変容を見ていくことで、人間関係の向上が図られたかを検証する。

3.1.2 分析方法

小松崎らの形成的評価票^②を活用した。アンケートは3段階評定法(「はい」「どちらでもない」「いいえ」)で調査した。アンケートの内容は、5因子(「集団的達成」「集団的思考」「集団的相互作用」「集団的人間関係」「集団的活動への意欲」)10項目のものである。アンケート項目を表1に示す。

表1 体育授業における児童の集団的・協力的活動を評価する形成的評価票

1. あなたのグループは、今日の課題にしたことを解決することができましたか。
2. あなたは、グループのみんなで成し遂げたという満足感を味わうことができましたか。
3. あなたのグループは、友達の見解に耳を傾けて聞くことができましたか。
4. あなたのグループは、課題解決に向けて積極的に意見を出し合うことができましたか。
5. あなたは、グループの友だちを補助したり、助言したりして助けることができましたか。
6. あなたは、グループの友だちをほめたり、励ましたりしましたか。
7. あなたは、グループがひとつになったように感じましたか。
8. あなたは、グループのみんなに支えられているように感じましたか。
9. あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員で楽しむことができましたか。
10. あなたは、今日取り組んだ運動をグループ全員でもっとやってみたいと思いますか。

データの処理は10項目の平均値による分散分析である。結果については、5%水準で有意に向上したとする。
 (+ p < .10 * p < .05 ** p < .01)

また、10項目の分散分析の結果と班のメンバー全員での練習時間との相関をピアソンの相関係数で比較した。

3. 1. 3 結果

図1は、小松崎らの考案した調査票による全員の平均得点の推移である。グラフより、第1時と第6時を比較すると、増加していることがわかる。この結果について分散分析を行った結果、有意であった。F(1,38) = 9.75, p < .01**。このことから、量的調査により、人間関係の向上が図られたことがいえる。

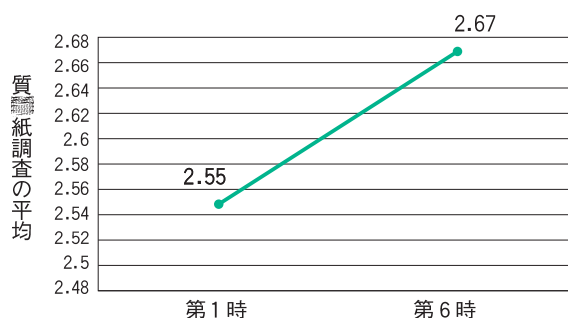


図1 質問紙調査による全員の平均得点

次に、質問紙調査と班のメンバー全員での練習時間との相関についてみていく。ここでは、全員での練習時間の定義を①全員が一つの技あるいは同じ技の練習をしている、②練習している学習者を他の学習者全員が見ている、③全員で話し合いをしている、こととした。図2は第2時から第5時までの1班の全員での練習時間の推移である。徐々に練習時間が増加していくのがわかる。そのグラフに質問紙調査のグラフを合わせたものが図3となる。図3のグラフでは、それぞれの数値が同じように推移していることがわかる。ピアソンの相関係数は、 $r = .98, p < .05^*$ となり、全員での練習時間と質問紙調査には相関があることが明らかとなった。同様に図4のように、2班の第2時から第5時までの練習時間と質問紙調査との相関について見ると、 $r = .97, p < .05^*$ となり、やはり相関があることが明らかとなった。

これらのことから、班のメンバー全員での練習時間が多いほど、人間関係の向上が見られることが示唆された。

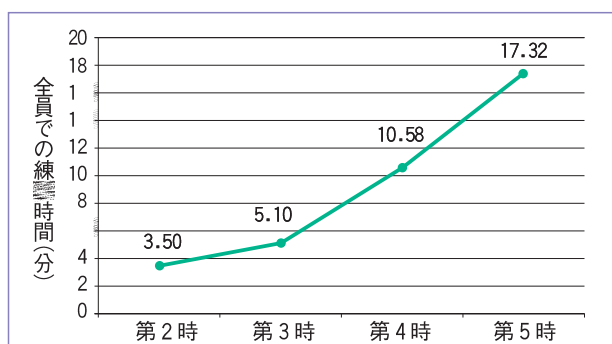


図2 1班の全員での練習時間

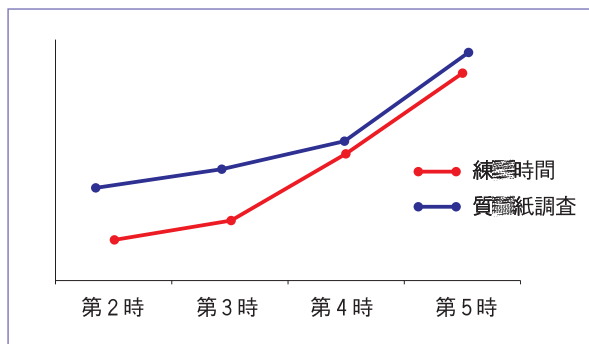


図3 1班の練習時間と質問紙調査の平均の推移

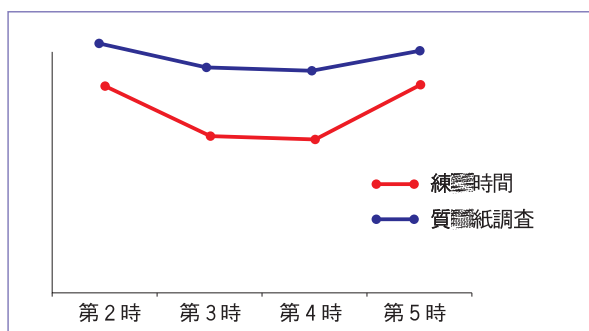


図4 2班の練習時間と質問紙調査の平均の推移

3. 2 分析2：練習中の会話や発表に向けた話し合いから見た人間関係の向上

3. 2. 1 目的

練習中の励ましや賞賛、話し合いの中での同意・提案によるかかわりの増加による人間関係の向上について検証する。また、コンビネーションなわとびの特性である学習者が技の習得を自己評価することや進歩の具合を自己把握すること、他の学習者と同時に技の取得を確認し、評価することにより、人間関係の向上が図られていることを検証する。

3. 2. 2 分析方法

第1～6時の練習中の会話や発表に向けた話し合いの場面での会話を分析した。発表に向けた話し合いの時間を特別に設定せず、練習中に自由に相談して良いこととした。

3. 2. 3 結果

事例1は1班の第4時の練習中の会話である。ここでは、人間関係づくりを苦手とするFを抽出し、Fの他のかかわりを見ていくことで人間関係の向上を明らかにしていく。

第1時から第3時まで班のメンバーとかかわろうとせず、他の班の様子を見ていたり、一人で練習したりしていた。それまでも何度か班のメンバーに誘われたものの、「なわとびが苦手である」、「うまくできないからやだ」などの理由をあげ、一緒に跳ぼうとしない様子が見られた。第4時に、班のメンバーが全員でのトラベラーを練習することになり、誘われると一緒に練習を始めた。しかし、なかなかうまくいかない様子を見たFが班のメンバーを励ます様子が見られた。Fは第4時の授業後に行った質問紙調査の項目である「グループの友だちをほめたりはげましたりしましたか」に初めて「はい」を選択した。

事例1 1班 第4時 練習中の会話

〈事例1〉

(全員でトラベラーの練習をはじめる。)

C：来てよ～。

B：F～。

A：F～。

(Fが練習に参加する。なかなか最後までいかず、途中で引っかかってしまったDに対し)

F：おいしい、おいしい。

D：もうちょっとなんだけど。

事例2は、1班の第5時の発表に向けた話し合いのプロトコルである。前時に班のメンバーと初めて一緒に練習することができたFは、次時の発表会での順番を決める話し合いにも参加するようになる。この時間では、Fは意見こそ出さなかったもののリーダーのAの意見に同意するうなずきをしていた。そのことで他のメンバーも同意し、練習を始めることができた。

事例2 1班 第5時 発表に向けた話し合い

〈事例2〉

A：最初にレインボーやって・・・。

B：レインボーやって。

A：2回目に、えっとレインボーが続いたら、で、終わったら、えっと何だっけ？あの6人、6人でとんで・・・。

D：8の字の・・・。

A：一人で回すやつやって、それで終わったら。終わるかな、これで。

D：つなぐの大変。

A：でも、いいんじゃないか。

F：うん。

(しばらく間があく)

E：いいと思うよ。

B：いいと思います。

A：じゃあ、それで決定でいいでしょうか。

全員：いいです。

A：よし、やろう。

この話し合い後に1班は全員で発表会に向けた練習をはじめていた。第5時の終了後の質問紙調査で、Fは質問項目の「友達の意見に耳を傾けて聞くことができましたか」に初めて「はい」を選択した。また、1班の他のメンバーもそれまでの自由記述の感想では、「全員でできなかった」「そろわない」などの意見を書いていたが、第5時終了後には、「今日はいい感じでできてよかったです」「とても楽しかった。協力できた」などの肯定的な記述をしていた。

事例3は2班の第2時の練習中の会話である。ここでは、コンビネーションなわとびの運動特性がよく出ているプロトコルから、人間関係の向上を明らかにしていく。2班は第1時では、2人組あるいは3人組で練習をしていることが多かった。第2時もはじめは2人組か3人組で練習していたが、他の班のトラベラーを見て全員でやることにした。練習を繰り返しながら7回目で成功する。その際に技の成功を自己評価しているが、同時に他者評価も行い、意欲的に学習する姿が見られるようになる。もう1回チャレンジし、成功したことで全員が喜びや達成感を共有していることがわかる。

事例3 2班 第2時 練習中の会話

〈事例3〉(全員でのトラベラーの練習をはじめる。)

(Hが単縄を回し、準備する。)

H：(跳びながら) I，ならんで～。

(H，自分で引っかかってしまう)

(2回目，1番目のGで引っかかる)

K：わたし，(どうして引っかかるか) 見てみる。

(K，列より抜けて離れて見ている)

(3回目，Gで引っかかる)

G：おれ回す。

G：せーの。

(4回目，1番目のHで引っかかる)

G：あんまりそれってないんじゃないか。
 K：わたし回してみる。
 （5回目，1番目のHで引っかかる）
 H：はえーよ。
 （6回目，Hで引っかかる）
 K：なんでだめなの。
 H：おれ（離れて）見てる。
 （Gが単縄をもつ）
 G：せーの。
 （7回目，4人跳ぶことに成功）
 J：おっ。
 K：お～。（拍手）
 L：お～。（拍手）
 K：できたよね，いま。
 L：わ～。（拍手）
 L：もう1回やろう。
 K：H，入って。
 K：せーの。
 G：ちょっとまって。（跳ぶタイミングが）合っていない。
 全員：せーの。
 （8回目，全員で跳ぶことに成功）
 全員：いえ～い。（拍手）
 K：できた。
 L：これ（発表会に）入れよう，これ。

さらに，8回目にはそれまでになかった全員でのかけ声も自然に出てくるようになった。

事例4は技の習得を確認し，進歩の具合を把握していることがわかるプロトコルである。6班の第2時の練習中の会話を見ると，全員でのトラベラーにチャレンジすることになり，練習をはじめますが，いきなり全員は難しいと考え，3人で練習をはじめ成功する。そこで進歩の具合を把握し，メンバーが改めて全員でチャレンジするという場面である。

事例4 6班 第2時 練習中の会話

〈事例4〉

M：まず（発表の順番の）1番が・・・。
 O：1番が？
 M：全員跳びね。
 N：ねえねえ，Mちゃん，このなわとびでやろう。
 O：全員ででしょ？まずできるかどうかたしかめてから。
 （全員で並ばず，三人ではじめる）
 O：（跳ぶタイミングを）合わせろよ。
 O：いっせーのーで。
 （3番目のMで引っかかる）
 O：おまえいけそうじゃん，いけるいける。
 P：うん，いけるいける。
 （全員が入って練習をはじめ）
 O：いっせーのーで。
 O：Qで引っかった。じゃあ，Qを最初にしよう。
 O：よし，いいよ。

ここでは，なわとびを苦手としているQを気遣い，跳びやすい先頭にしてあげるというやさしさも見ることができ

た。また、お互いに励まし、賞賛することで学習意欲も高まっていることがわかる。

4 結論

結果1から、コンビネーションなわとびの実践を行うことで、人間関係の向上が図られた。また、班全員の練習時間が多くなるほど、人間関係の向上が図られるということが示唆された。

結果2から、コンビネーションなわとびは、技の習得過程でアドバイスや励まし・賞賛の言葉が生まれる。また、発表に向けた話し合いで、新しいアイデアなどの提案や他の学習者の意見に対する同意が生まれる。さらに、技の習得を自己と他者が同時に評価・確認でき、達成感や喜びを共有することができる。これらのことから、会話数が増加し、かかわりが増え、コミュニケーションが図られていく。その結果人間関係が向上していくと考える。さらに、抽出席Fの例のようにかかわりを苦手とする学習者に対してもスムーズにグループに参加できる学習であると言える。

5 今後の課題

本研究では、コンビネーションなわとびの基本的な技を3つ紹介し、練習することとした。しかし、技の達成が難しいものもあり、技の習得が困難な場合に質問紙調査による評価の低下が見られた。このことから、3つの技に限定せず、より多くの技を紹介することで評価の低下を防ぐことができると考える。その際に、それぞれの技に対する練習時間を十分確保することも必要であると考ええる。

また、今回は班のメンバー内での人間関係の向上にとどまった。今後は学級集団全員での人間関係の向上を目指すことのできる学習デザインが必要であると考ええる。

引用文献

- (1) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説体育編」, pp.1-5, 2008.
- (2) 小松崎敏, 米村耕平, 三宅健司, 長谷川悦示, 高橋健夫：「体育授業における児童の集团的・協力的活動を評価する形成的評価票の育成」, スポーツ教育学研究21巻No.2, pp.57-68, 2001.
- (3) 近藤英基, 高橋健夫：「体育授業における人間関係の変容に及ぼす集団内の会話に関する事例的研究」, 筑波大学体育研究科研究論文集第22巻, pp.45-48, 2000.
- (4) 日野克博, 高橋健夫, 八代勉, 吉野聡, 藤井喜一：「小学校における子どもの体育授業評価と学級集団意識との関係」, 体育学研究45(5), pp.599-610, 2000.
- (5) 米村耕平, 福ヶ迫善彦, 高橋健夫：「小学校体育における『授業の雰囲気』と形成的授業評価との関係についての検討」, 体育学研究49, pp.231-243, 2004.
- (6) 栗田裕子, 久保田善彦, 西川純：「相互作用による体育技能の向上に関する研究」, 日本教科教育学会誌, 第7巻第1号, pp.55-61, 2007.
- (7) 佐伯聡史, 池田優介：「新しい教材としての『連鎖交互とび』の有用性について」, 富山大学人間発達科学部紀要第5巻第2号, pp.67-73, 2011.
- (8) 上原三十三：「なわとび運動における『二人連鎖交互回しとび』の指導に関するモロフォロギー的研究」, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要第13号, pp.161-168, 2010.

A Case Study on Improvement in Human Relations by Combination Rope Skipping

Yoshiaki MIZUOCHI* · Kazuhiko MATSUYA**

ABSTRACT

In this research, we had a class in the Combination Rope Skipping in elementary school gymnastics study. And the effect which a Combination Rope Skipping gives to a student's human relations was investigated.

As a result, the following became clear.

- Students come to encourage each other.
- Students comes to advise on each other.
- Student's time to practice together increases.
- Students can check of the success of work with other students.
- Students can experience a sense of accomplishment with other students.

By the above, the student raised human relations.